

## 最も思い出深い クラシック音楽

株式会社大丸松坂屋百貨店  
代表取締役社長

澤田 太郎



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第13回は、今年111周年を迎えた東京フィルのルーツとして1911(明治44)年に生まれた「いとう呉服店少年音楽隊」の母体「いとう呉服店」を前身とする株式会社大丸松坂屋百貨店の代表取締役社長澤田太郎様。東京フィルの法人賛助会員として今もご支援を続けてくださっています。今回はご自身とご家族の音楽の思い出を綴っていただきました。

明治44年、松坂屋の前身である「いとう呉服店」は、名古屋の栄町に開業した新店舗の多目的ホールで行うイベントを盛り上げるために、海軍軍楽隊の学長を招き、一般公募による12名で結成されました。最初は管楽器だけのバンドでしたが、2年後にはオーケストラに。大正13年から昭和13年までは、春の選抜高校野球大会の開会式の演奏をつとめるまでになり、昭和23年には現在の名称の東京フィルハーモニー交響楽団と改称しました。わが国を代表する交響楽団のルーツが松坂屋であるということが大変誇りに思っています。

「クラシック音楽に魅せられて」への寄稿のお話をいただき、まず考えたのは、私にとって最も思い出深い曲は何であろうか、ということでした。すると「魅せられて」とは少し違う方向にはなりますが、ショパンのエチュード『革命』が思い浮かびました。

私には3歳上の姉がいます。姉は幼いころからピアノを習い続け、高校3年生になると音大のピアノ科を志望しました。私が中学3

年生の時です。音大入試の課題曲の発表がこの年の秋にあり、その一つが、ショパンのエチュード『革命』でした。私の家族は入試までの半年余りの期間、この『革命』と付き合うはめになりました。最初のころは、同じ箇所を何度も繰り返したり、音が合わなかったり、テンポも一定ではなく、「また始まったよ」と両親と首をすくめていました。特に繰り返し練習している旋律の刷り込みは強烈で、テスト中に頭を駆け巡って困ったこともありましたが、時間の経過とともに腕前も上達し、曲の全体感がわかるようになってきました。猛特訓の賜物でしょうか、姉は志望校に無事合格し澤田家にも春が訪れました。私も両親も心から喜んだのは言うまでもありませんが、『革命』から解放された喜びの方が大きかったのかもしれない。姉は明けても暮れても、休みの日はほぼ一日中練習をしており、私にとって『革命』は最も生活に密着したクラシック音楽であり、目標に向かってひたすら努力することの象徴となりました。



澤田太郎(さわだ・たろう)

1960年神戸市生まれ。1983年滋賀大学経済学部卒業後株式会社大丸入社。2011(平成23)年大丸神戸店長、2012(平成24)年大丸心齋橋店長に就任。大丸心齋橋店本館の建て替えを指揮し、新しい百貨店モデルの具現化を進めた。2018(平成30)年J.フロント リテイリング株式会社取締役 兼 執行役常務経営戦略統括部長に就任。2020(令和2)年株式会社大丸松坂屋百貨店代表取締役社長に就任。

株式会社大丸松坂屋百貨店様は、大丸・松坂屋の屋号で全国に百貨店を15店舗展開されています。江戸時代の創業以来、「お客様や社会への貢献を最優先に考える(先義後利)」という精神は受け継ぎながら、お客様や社会から求められ続ける「新しい百貨店の理想形」を目指し、たゆみない挑戦と進化を続けています。大転換期の今、これから先起こる様々な変化を楽しみながら「百貨店」の枠を超えた未来を創造していきます。<https://www.daimaru-matsuzakaya.com/>



1911(明治44)年発足当時の「いとう呉服店少年音楽隊」(提供=一般財団法人 J.フロント リテイリング史料館)

今改めて『革命』の旋律を耳にしますと、あの半年間が懐かしく思い出されると同時に、コロナ禍で大きく変わったビジネス環境に立ち向かっていく勇気が、お腹の底から湧いてくるように感じます。